http://alce.jp/journal/ 第 16 巻（2018）pp. 12-32 ISSN：2188-9600

Studies of Language and Cultural Education SLCE 言語文化教育研究 発行・編集 言語文化教育研究学会 ALCE Association for Language and Cultural Education

特集「ナラティブの可能性」

寄稿論文

なぜ物語は実践研究にとって重要なのか

読者・利用者による一般化可能性

柳瀬　陽介 *

（広島大学）

概要

本論文は実践研究における物語の重要性（および危険性）を，物語概念を理論的に整理することで明らかにした。理論的整理は，心理学者ブルーナーの物語様式の理論を社会学者ルーマンと哲学者アレントの意味理論で補強しながら導入し，さらに歴史学者ホワイトの物語的歴史についての理論を重ね合わせることによって行った。その結果，形式・題材・素材・筋書・言語・基調・実在性の観点において物語を科学規範様式の論証と対比的に特徴づけた。その特徴づけの中で，世界の複合性と人間の複数性を扱いうる意味概念を提示した。さらに，実践的過去を描く歴史叙述と物語の共通性を指摘し，物語の重要性（「私たちは何をするべきか」という問いかけに答えること）と危険性（出来事を単純な教訓話やイデオロギーにしてしまうこと）を指摘した。このような物語は一般化可能性をもつが，それは，実践研究を実践的に読み解こうとする読者の想像力と思考力に応じて得られる読者・利用者による一般化可能性であることも示した。

Copyright © 2018 by Association for Language and Cultural Education

キーワード　論理－科学的モード，ナラティブモード，ブルーナー，実践研究，一般化可能性

1. 物語と実践研究

実践を対象とする研究において物語（narrative）を使うことは，日本の学術界においても認められるようになってきた。しかしそもそも物語とは何であり，なぜ物語は実践研究で重要なのかという問いへの答えは十分には共有されていない。

1. 1. 本論文の背景

英語圏の学術界は，日本より早く実践論文における物語の利用を受容したが，物語の利用の可能性を十分に実現したとまだ思えない。Nelson（2011, p. 465）は，物語を使った質的研究は，「細部にはこだわるが深みがなく，実践者の不安は表明されても洞察が不十分である。実際に起こったことの記述は多いが，それが特に他の現場（locale）にいる読者に対して何を意味しうるのかが十分に示されていない」と述べる。それでは，深みや洞察を示

* *E-mail:* yosuke.yanase@gmail.com

すにはどうすればいいのだろうか。物語とは意味を見出すこと（meaning-making or sense-making）[1]であるという合意は確かに広く共有されているが（Barkhuizen, Benson, & Chik, 2013），読者が実践研究の意味を見出すとはどういうことなのだろうか。Barkhuizen（2011, p. 396）はさらに，物語から見出される意味は能動的（active）で流動的（fluid）であり，永続的（permanent）で異なる見解を許さないもの（unchallengeable）ではないと述べる。その主張を直観的に理解できる実践者は多いかもしれないが，その反面，意味がなぜ次々に自己展開し一義的に確定しないのかを理論的に説明できる者は少ないだろう。Johnson & Golombek（2013, p. 86）は，物語を実践者と読者をつなぐ媒体的手段（mediational tool）であるとも述べる。これも直観的には受け入れられる主張であるが，そもも物語とはどのような媒体なのかと問われると私たちは困惑してしまう。要は,「物語と物語研究が定義し難いことについては既に悪評が定着」しているわけである。（Barkhuizen, 2013, p. 2）私たちはまずは物語について，そして次に物語を使った実践研究のあり方について，理論的な理解を深めなければならない。

1．2．本論文の目的と基本用語の（予備的）定義

このような背景から生じる問題意識に基づき，本論文は物語概念を理論的に整理し，実践研究における物語の重要性（および危険性）を明らかにすることを目的とする。理論的整理は，心理学者ブルーナーの物語様式の理論を社会学者ルーマンと哲学者アレントの意味理論で補強しながら導入し，さらに歴史学者ホワイトの物語的歴史の理論をそれと重ね合わせることによって行う。

本論文が主に考察する「実践」は言語教育（特に日本における英語教育と日本語教育）である。だが，この論文の議論はさまざまな実践においても発展可能なものではないかと筆者は考えている。また本論文での「実践研究」は，細川，三代（2014，p. 80）の概念規定である「実践への参加者たちが協働で批判的省察を行い，その実践を社会的によりよいものにしてゆくための実践＝研究」により定義されるものとして考える。筆者は，この「実践研究」の定義は，大胆に単純化するならば「実践者のための研究」（research for practitioners）であり，「実践者研究」（Practitioner Research）すなわち「実践者のための実践者による研究」（research for and by practitioners）を含むがそれだけには限らないものと考えている。後者の「実践者研究」の概念規定は，これまで研究者として認識されなかった実践者の権利拡張（empowerment）においては重要な意義をもつが,「実践者研究」だけが「実践研究」であるとすれば，たとえば，研究対象の実践には直接関与していない者が，ある実践者の物語を参照しながら実践者のために行う分析が「実践研究」の範疇から排除されてしまう。筆者は，実践はそれに直接関与する者だけに限らずさまざまな人々の協働によって解明されるべきものと考えているため，この論文では実践研究を実践者研究だけには限らないものとして規定する。

物語概念は次章で詳しく定義するが，ここではその予備的な定義をしておく。本論文はブルーナーの論を基盤とすることもあり,「物語」を彼の言う“narrative”の訳語として用いる。「ナラティブ」という用語を使わないのは，まだ日常的には普及していないカタカナ語を主要概念とすることにより，一般読者を必要以上に遠ざけたくないからである。カタカナ語についてはその元となる言語に習熟していない限り，その含意や関連語との差異がわかりにくいし，派生語も作りにくい。漢語訳・大和言葉訳をした場合と異なり，カタカナ語はこれまでの日本語遺

1　意味概念については後述するが, 本論文は“meaning”と“sense”の差異に関しては，前者が意味概念を総称的に表現する語で，後者は意味概念の身体性や感受性を強調した語であるというぐらいの区別にとどめそれ以上の考察は割愛する。言語教育における感受性概念については柳瀬（2018a）を参照されたい。

産との比較による吟味から基本的に逃れられる。カタカナ語は，元来は外国語とはいえ千年以上の歴史をもつ漢語にくらべて性格を大きく異にしているので，カタカナ語の多用は慎むべきであるという信念を筆者はもっている。もちろん“narrative”を「物語」と訳すことにより，この概念と，日本語が古来からもっていた「物語」の含意との類似点や相違点を吟味する必要も生じるかもしれない。だが，それは日本語で読み書きをする者が通り抜けなければならない試練だと筆者は考えている。

ブルーナー自身は明確には述べていないが，“story”――後に述べるように筆者はこの語を「ストーリー」もしくは「話」と翻訳する――についてもここで述べておく。「ストーリー」とは，千野（2017）がまとめるように，太古から現在まで使われている人間の認知形式（理解の枠組み）の一つである。日本語の慣用でも，「話がある」「お話はうかがいました」「そういう話ではない」「話をややこしくするな」「話にならない」などと言う時，私たちは具体的詳細よりも理解するための枠組みについて語っている。この抽象的な意味での「話」が語られたり書かれたりするなどして言語形式に実現した結果が「物語」である。「ちょっと話があるんだ…」と述べた人の心中に，完成された「物語」が既にあり，その人はそれを記憶から一字一句間違わずに再生するだけといったことは少ないだろう。「話がある」と切り出す人は，相手の反応を見ながら物語り（narration）を始めるはずである。まとめるなら，「話・ストーリー」（story）が，「物語る行為」（narration）により特定の言語形式を得て「物語」（narrative）となることになる。

以上が「物語」と「話」に関する基本的な区別であるが，もちろん日常語においては「物語」と「話」がほぼ同義語として使われる場合もある。また，カタカナ語の多用に関する懸念は前に述べたとおりであるが，「ストーリー」というカタカナ語はかなり日本語の中に定着しているので，必要に応じて「ストーリー」という表現は使用する。

2. 科学と物語

上記の予備的な定義を受けて，この章では，心理学の泰斗であり認知心理学の創設から文化心理学への転換と幅広い研究を進めたブルーナー（Bruner, 1986, 1990）の枠組みを用い科学規範様式との対比で物語様式の概念整理をする。科学規範様式（the paradigmatic mode）と物語様式（the narrative mode）は二つの異なる思考様式（mode of thought）である。科学的な基礎教育を受けた近代人による発話は，二つの思考様式を使い分けながら生成されることが多く，もっぱらどちらか一つだけを使った発話は，例えば数学的証明や昔話などに限られる数少ないものであろう。ただ，二つの思考様式が同じ人間によって使い分けられるといっても，どちらか一方の様式をもう一方に理念的に還元してしまうことはできない。科学規範様式は物語様式にはない特徴を有するし，その逆も真である。これら二つは理念的に独立しており相補的である。近代は，科学技術の発展に伴って科学規範様式の思考に注目が集まり，太古から受け継がれている物語様式は特に学術界の一部で反動的に軽視されたが，人間の営みを十全に理解するためには両者を適切に理解しなければならない。

表 1. 科学規範様式と物語様式の特徴の比較

	科学規範様式 （論理 - 科学様式）	物語様式
形式	論証	話（ストーリー）
題材	真理	意味
素材	明確な指示対象	行為と意識という二重の風景に存在する登場人物
筋書	1）序論（命題提示） 2）方法 3）結果 4）考察	1）定常状態 2）破損 3）危機 4）修復
言語	一義的な言語 1）具体的に定義 2）実在性の客観化 3）科学的視点	曖昧（喚起的・比喩的）な言語 1）諸前提の想起 2）実在性の主観化 3）複数の視点
基調	独話的単旋律性	対話的多声性
実在性	直説法的実在性	仮定法的実在性

両者の特徴を予め対比的に整理すれば表１のように表現できる。

以下，この表１に基づき，最初に科学規範様式の特徴を概観し，次に物語様式の特徴についてやや詳しくまとめる。

2．1．科学規範様式

科学規範様式は，自然科学の基礎教養として徹底的に叩き込まれる思考形式であり，本論文の読者にとって周知のことであろうからここでは短くまとめるだけにとどめる。科学規範様式 —— 論理 - 科学様式（logico-scientific mode）とも呼ばれる —— は，典型的には論証（argument）という形式をとる。論証はある特定の命題（proposition）の真理（truth）を題材（theme）とし，命題が真（true）であること —— あるいは偽（false）とは言えないこと —— を立証する[2]。論証は明確な指示対象（referent）を素材（stuff）として，通常，序論（命題提示）- 方法 - 結果 - 結論（Introduction-Method-Result-and-Discussion: IMRAD）の筋書（plot）で進む。使われる言語は一義的（unequivocal）であり，用語は具体的に定義されることが求められる。指示対象の実在性（reality）は客観的（objective）なものとして認識される。その認識の視点は人類が「科学」として認める（大まかに言って）一つの視点であるため，論証の基調（texture）はその視点からの見解しか聞こえない独話的（monologic）で単旋律的（monophonic）なものなものである。記述は直説法（indicative mood）によるものがほとんどで，仮定法は仮説構築の際に使われるぐらいでしかない。

2．2．物語様式

それでは物語様式は，上の形式・題材・素材・筋書・言語・基調・実在性の観点において科学規範様式とどのように異なっているのだろう。

2．2．1．話という形式

物語様式の思考は，典型的には話（story）の形式をとる。前述したように，私たちが「話があるんだ」と語り始める時には，それは電子メールなどでの箇条書き情報伝達などとはまったく異なる語り方をし，そのような情報伝達では決して達成できない効果をもたらすことを意図している。物語様式での表現の典型例は昔話かもしれない。近代の小説となると，もちろん物語様式で語られる部分は多いが，例えば説得や説明といった場面では科学規範様式の影響を受けた書き方がみられるからである。逆に，科学論文でも中核の部分は論証の形式をとるだろうが，そこにたどり着くまでの序論では後に説明する物語様式の筋書にそった話の運び方（storytelling）をして読者の期待感を高めることが多い（オルソン，2015/2018）。また経済学者などがマスメディアで論評をする場合においても，要所では科学規範様式で導き出されたデータを出すが，そのデータは大きな「ストーリー」（例，新自由主義的枠組みなど）の中に埋め込まれていることが多い。近代では科学規範様式に注目が集まったが，有史以前から現代に至るまで，物語様式による「ストーリー」はいたるところに蔓延している。物語様式の特徴を理解しておくことは，科学規範様式の特徴理解と同様，現代における言語使用の能力を高めるための必須の課題であろう。

2．2．2．意味という題材

科学規範様式における題材が真理（truth）であったのに対して，物語様式は意味（meaning）を題材とする。ただこの「意味」とは私たちが日常生活で使っている広範な概念であり，科学規範様式における明確な指示対象といった denotation（明示的意味）にとどまらない。私たちが「おっしゃっていることの意味がわかりません」などと言う時，しばし

2　この意味で，科学（規範様式）が扱うのは，いわゆる「小文字の真理」（“truth” with a small t）であり「大文字の真理」（“Truth” with a captial T）ではない。

ばそれは辞書的な定義（明示的意味）の理解ができないことを述べているわけではなく，〈あなたが言ったことが含意しているストーリーが理解できない〉，あるいは〈あなたのストーリーを受け入れる理由がわからない〉ことを述べている。さらに，私たちが時に語る「生きる意味」といった表現での意味概念を言語学は扱わないとしばしば宣言するが，物語はそのような「意味」もむしろ積極的に扱う。

そのような広い「意味」は言語学の semantics[3] によってではなく，むしろ哲学的な意味理論（theory of meaning）によってうまく説明される。20 世紀最大の社会学者の一人であるルーマン（Luhmann, 1990, 2007）は，意味を現実性（Aktualität/actuality）と可能性（Potentialität/potentiality，Möglichkeit/possibility）[4] の統一として考える。現実性は，意識やコミュニケーションの焦点となっている要素であり言語学 denotation にほぼ相当する。他方，可能性は言語学の connotation よりもはるかに広い意味概念である。意味の可能性は，現時点では焦点化されず意味の現実性の背後に潜んでいるが，現時点での現実性とさまざまな経路と強度で結びつき[5] 次の現実性となる可能性をもった無数の潜在的な意味の要素を指す（柳瀬，2017a）。このようにルーマンが私たちの意識やコミュニケーションにおいて想定する意味が，物語様式の題材である。

このように semantics の connotation よりもはるかに広い可能性を意味に認めることには必然性がある。ルーマンによれば，意味は，人間が世界の複合性（Komplexität/complexity）に対応するために進化した意識とコミュニケーションにおける媒体（Medium/medium）である。世界の複合性とは，世界の要素が他のあまりに多くの要素につながっているため，人間がある要素について思考あるいは行為し始めても，それが他のどの要素と結びつきどのように展開しどのような帰結を迎えるか見当がつかない状況を指している[6]。人間がもちいるテクノロジー（道具や機械）が発展し，人間がコミュニケーションする手段も領域も拡張するにつれ，人間の言語の意味は，さまざまな事態に対応できるように進化せざるをえなかった。その進化は一方で，多くの語彙を生み出し，人間がとらえる現実性をますます細かく区分した。しかし，もし人間の言語が細分化された現実性だけを意味としているだけ[7] だったら，人間は，世界の複合性のためにどう展開するかわからない現実への対応に翻弄されることになる。たとえばある語（X）がその意味として現実性（A）しかもっていないと仮定しよう。その語 X を頭の中で思いつ

3　この“semantics”は「意味論」ではなく，「意味素論」と訳す方が適切なのかもしれない。「意味」の基本要素だけしか扱っていないからである。

4　ルーマンは Potentialität と Möglichkeit をほぼ同義として使っているようであり，それらにどのような差があるのかは明らかには述べていない。ただ，前者がラテン語由来で，後者がより日常的な語であることからすれば前者を「潜在性」，後者を「可能性」と訳しわけることはできるかもしれない。本稿では用語のわかりやすさを優先し「可能性」という訳語を優先的に使うこととする。

5　「意味の現実性と可能性がさまざまな経路と強度で結びつく」という表現は，脳の神経回路を想像すればわかりやすいだろう。意識の一種としての意味（Tononi, 2012；柳瀬，2018b）は，脳の神経回路で発生し，集中的に発火しているニューロン群（現実性を表象する部位）は，さまざまな経路（軸索）とそれぞれに異なる信号伝達の強度で分散的に存在する他の大量のニューロン（可能性を表象する部位）と結びついていると考えることができる。

6　わかりやすい例でいうなら，（縦三列・横三列の九のマス目での）三目並べのゲームは自らの行為が招く帰結について容易に予想ができるので複合的ではないが，囲碁のゲームでは自らの布石がもたらす帰結についてすべて予測することはスーパーコンピューターでも不可能であるので囲碁は複合的である。なお“complexity”を「複雑性」と訳す場合も多いが，その訳語はむしろ“complicatedness”（＝要素が多いが，それらが必ずしも相互に結びついていない事態）に充てるべきだと考え，ここでは「複合性」という訳語を使う。

7　細分化された現実性しか意味としてもたない言語の例は機械語（machine code，machine language）である。機械語は，コンピュータのプロセッサが一義的に読み取り実行に移せるように書かれた二進法の数字の並びであり，そこには暗示的意味や可能性に関する解釈や想像の余地はない。

いた人間は，現在直面しているAという事態について自らの意識を焦点化することには成功する。しかし世界の複合性ゆえにAはB, C, D, E, …といったさまざまな事態に展開しうる。だが現実性Aしか意味として有していない語Xは，それらの潜在的事態にまったくつながっておらず，語Xはそれを使う人間に対して十分な準備を提供できない。しかしもし語の意味に現実性だけでなく可能性（P）もあったら，Xという語は意識の焦点においてAという現実性について対応する一方で，意識の周辺部で次に現れうる潜在性としてP_1, P_2, P_3, P_4, P_5, …という可能性への準備をすることができる（ここでは説明を簡単にするために，P_1, P_2, P_3, P_4, P_5, …は，B, C, D, E, F, …に対応していると考えよう）。このように現実性と可能性の両方を意味としてもつことにより，意識に濃淡[8]が生まれ，人間は意識の中核（濃い部分）において直近の現実に対応しつつ，意識の周辺部分（淡い部分）で遠くない未来に可能な事態に備えることができる。ルーマンの意味理論は，複合的な現実世界への対応というきわめて実践的な課題にとって適した意味概念を提示している。

そのようなルーマンの意味概念を，別のやり方で説明しているように思えるのが（政治）哲学のアレントである。20世紀後半の現実社会との強い関わりの中でさまざまな作品を残したアレントは，その主著（Arendt, 1998, 2002）の中で，意味を一義的に定められるものではなく，複数の人々がさまざまに異なる観点・視点からその意味の対象について関わりあうことによって少しずつ姿を現すものだとしている。意味が生じるのは，私たちが複数形で存在する限りのこと，つまり，異なる観点・視点を有する複数の人間が同じ世界を共有しながら共生する複数性（Pluralität/plurality）があってこそと彼女は考える。

たしかに科学規範様式の論証ではたとえば「本論文での『幸福』の意味は，○○の幸福度指数によって定義される」といったように一つの観点・視点から概念が明確に定義される。しかし，私たちがたとえば「学校教育の意味」について語り合うとき，その「意味」は例えば，学校教育に関わるさまざまな人々がそれぞれの物語を語ることによってだんだんと明らかになってゆくものではないだろうか。ある集まりで，教師，生徒，保護者，カウンセラー，優秀な成績で学校を卒業した社会人，学校を中退したばかりの若者などのそれぞれが学校教育の意味について自分なりに学校教育についての物語を語り，それらの物語が連なることでさらに大きな物語が構成されるような語り合いを想像してほしい。その物語を経験した者は，「学校教育の意味」について以前よりも確実に洞察を深める。

もちろんその洞察は一つの命題として集約されるわけではない。仮に結論めいた表現が最後に共有されるとしても，それは論証の命題のように一義的に真偽が定められる表現ではなく，それ自体がさらなる物語による展開を必要とする表現となる。アレント（Arendt, 1968, p. 105）は「物語を語ることによって，私たちは意味を定義するという過ちを犯さずに意味を明らかにすることができる」（storytelling reveals meaning without committing the error of defining it）とも言う。私たちの人生にとっての意味は，物語る中で曖昧かつ動態的に――あるいはBarkhuizen（2011）の表現を使うなら，流動的かつ能動的に――示される。

そういった意味は「現実」（Wirklichkeit）を描き出す。アレントによれば，現実の「実在性」（Realität/reality）は，複数の人間の複数の観点・視点（Aspekte und Perspektiven/aspects and perspectives）からの語

8　この「濃淡」はニューロンの活性化の状況を示唆する表現である。ニューロンの活性化レベルおよびニューロン同士の結合の強度と様態は実にさまざまであるので，実際のニューロンの「濃淡」はきめ細かな階調を有するきわめて複雑な形象をもったものとなろう。

りと行為が共有されることで実感される[9]。一義的・一面的なだけの認識（例えば「学校教育」とは「学校教育法で定められた○○」である）は，私たちが学校教育について実感する「現実」とその「実在性」を十全には捉えていない。「現実」とその「実在性」は，多義的・多面的に認識されるものであり，それは「現実」に関わる複数の人間のことばと行為によって次第に理解されてゆくものである。

まとめるなら，物語の題材とは，真理ではなく意味，しかもある中核部（現実性）を有しながらももそこからさまざまに展開する広範囲な周縁部（可能性）を有する意味である。物語の意味は一義的には定義できず，物語の語りを通じて広がりをもった形で次々に発展して動態的に示される。物語は意味を通じて，具体的に確定された指示対象物にとどまらない現実の実在性を読者に豊かに実感させる。

2. 2. 3. 登場人物という素材

物語様式での素材である登場人物（characters）は，明確に指示され正確に計測される対象物 —— 科学規範様式における素材 —— と異なり，意味の現実性と可能性の両方を伝える言語によって複数の観点から描かれる。その複数の観点は少なくとも，行為（action）と意識（consciousness）の二つの水準を有する。登場人物は行為と意識という「二重の風景」（dual landscape）において描かれる。この二重の風景は近代の物語において顕著である。太古の口承物語ではもっぱら登場人物の行為だけが描かれていることも多いが（ジェインズ，1976/2005），近代の物語（小説）では，書籍という潤沢で安定した視覚表象媒体によって，登場人物の行為だけでなく心中の意識も詳しく記述することが容易になったからである。さまざまな出来事における登場人物の葛藤が描かれると，登場人物の行為の風景と意識の風景が異なる様相を呈し始める。ブルーナーは，物語は「人間の意図が遭遇する試練（vicissitudes of human intentions）」を描く（Bruner, 1986, p. 13）とも表現するが，この試練は行為と意識の二つの水準での描写があってこそ示されるものである。

2. 2. 4. 定常状態・破損・危機・修復という筋書

物語の筋書は，ブルーナーによるなら，定常状態（steady state），その破損（breach），危機（crisis）の到来，そしてその修復（redress）の試みと四段階を経る[10]。もちろん実際は，大きな物語の中に小さな物語がいくつも組み込まれたりそれらの物語が同時進行したりと，語られる物語の筋書はそれほど単純でもない。しかしどんな物語にも共通しているのは，この筋書の底流にある隠れた題材が，定常状態が保っていた意味 —— 特に価値（value） —— であることである。修復とは定常状態への回帰（あるいはその新生）であるが，それが望まれるのは価値の喪失が登場人物にとって耐えられないからである[11]。物語の舞台上にあるのが危機とその修復であるとすれば，その下には危機の到来によって強く自覚され始めた共同体の価値 —— 別の表現を使うなら正統性（legitimacy）や規範（canonicality） ——

9　ここで用語の整理をしておこう。現実（Wirklichkeit），実在性（Realität/reality），現実性（Aktualität/actuality）の三者は関連しているがそれぞれ別の側面を指示している用語である。現実は私たちが経験するものの総体であり，実在性はその現実を通じて私たちが覚える身体的・物理的実感である。現実性とは私たちが現実の中で行為する中で実感する意味の中核である。この実在性と現実性の区分は，ラテン語の語源である res（=thing）と actus（=act）に基づく。なお，「実在性」（Realität）と「現実性」（Aktualität）の源としての包括概念は日本語では「現実」ドイツ語では“Wirklichkeit”として表現できるが，英語において“reality”と“actuality”を包括する上位概念語を見出すことは少なくとも私にとっては困難である。

10　このようにブルーナーは四段階で説明するが，一般的には，状況説明（context），問題発生（problem），対応・解決（response/solution）の三段階を経ると説明されることの方が多い。

11　登場人物の背後にはもちろん物語の著者がいる。登場人物が巻き込まれる価値・正統性・規範についての葛藤が著者にとっても重要であるからこそ，物語は書かれる。

があるといえよう。ブルーナーは物語には劇的性質（dramatism）があるとも述べているが，これは登場人物が価値・正統性・規範を守るために人道的献身（moral commitment）を行うからである。このような物語の筋書には，私たちが大切にしている価値・正統性・規範が一種の通奏低音として流れている。

2．2．5．曖昧（喚起的・比喩的）な言語

物語様式では曖昧（ambiguous），特に喚起的（evocative）もしくは比喩的（metaphorical）な言語が積極的に使われるが，これは客観的に実在しているとされる対象を一義的・具体的に定義する科学規範様式の言語使用と好対照をなしている。曖昧（喚起的・比喩的）な言語を使用することがもたらす第一の特徴は諸前提の想起（triggering of presuppositions）である。物語は具体的な記述を曖昧（喚起的・比喩的）な言語で行うため，読者は物語で描かれた風景を十分想像はできるものの，そこにはどこか「これがこうだとすれば，あれはもしかすればああかもしれない」という前提部分の想像の余地が残され，読者は自らの想像力をさらに発揮してそれらの余白を補う。後述するように「読者が作者になる」わけである。

第二の特徴は実在性の主観化（subjectification of reality）である。実在性をあくまでも客観的で物理的に特定できるものとして扱い主観的な叙述を排する科学規範様式の流儀と異なり，物語は登場人物や語り手の主観的な叙述も独自の実在性の叙述として呈示する（アレントの言い方を借りるなら，物語は「現実」を描こうとするわけである）。2．2．2．でも述べたように，物語では同じ対象が一義的・一元的にではなく，多義的・多元的に描かれる。そしてそれらはどれか一つだけが正しく他は誤りとは断定されず，どれもそれぞれの観点・視点からは妥当なものとして理解される。その結果，同じ対象に対して複数の異なる主観的叙述が重なることもしばしば生じ，いわば世界が多元化される。これが物語の曖昧（喚起的・比喩的）言語がもたらす第三の特徴である複数の視点（multiple perspectives）の含意である。

観点・視点の複数性により，世界はもはや一義的・一元的には見られなくなる。読者は世界の同じ対象に対して異なる複数の理解が共存しうることを経験する。読者は物語を読み進めるにつれ，そういった複数の多元的な叙述の差異を保ったままに，世界を読者なりに統一的に理解する。私たちはしばしば，単一の観点・視点からの認識だけに固執しその他の観点・視点からの認識を排除しようとする者に対して，「現実がわかってない」とも言う。このように「多であり一であり，一であり多である」ような現実を描き出すためには，他の認識を否定してしまう一義的な言語よりも喚起的・比喩的で多義的な言語の方がふさわしいといえよう。

2．2．6．対話的多声性という基調

読者の想像力で補われた複数の主観的実在性に基づく叙述は，そのどれか一つが他を否定してしまうこともなく，複数の世界叙述として物語世界を構成する。物語様式での叙述の基調は，ある命題の真偽だけを扱う科学規範様式の基調とはきわめて異なり，複数の登場人物の意識と行動が対話的（dialogic）に絡み合う多声性（polyphony）である[12]。物語は，互いが異なるにもかかわらず，というよりはむしろ異なるがゆえに，相互に反応せざるをえない声の対話のように描かれる。その複数性は，複数の異なる旋律が複数の異なるリズムで複数の声部として同時進行する多声音楽のように進行し，そこでは主旋律・伴奏といった区別すら薄れてくる。むろん登場人物に

12　単旋律性（モノフォニー）と多声性（ポリフォニー）はもちろん音楽用語から転用された比喩である。単旋律性とは一つの声部の一つの旋律だけで構成される音楽の特徴であり，多声性とは複数の声部の複数の旋律が同時に演奏される音楽の特徴である。単旋律性の音楽の例としては一人で歌う簡単な童謡がわかりやすいだろう。多声音楽の例としてはパレストリーナやタリスといった西洋中世の宗教音楽（声楽）があげられる。また，周知のようにバフチンは，多声性（ポリフォニー）という用語をドストエフスキーの作品の特徴記述のために用いた。

は主要人物と脇役がいたり，主要人物にも主人公と敵対者がいたりするので，主要人物とりわけ主人公の声には読者の注目が注がれる。だがすぐれた物語は，敵対者や脇役の声も実に魅力的に描き，それらの声にも否定し難い説得力を与えている。逆に言うなら，私たちがそのような対話的多声性を活かした物語を好むのは，それこそに「現実」を見るからかもしれない。

2. 2. 7. 仮定法的実在性

これまで述べてきたように物語においてはそれぞれの登場人物によって主観化された実在性が複数存在する。読者は，そのどれ一つとしても自分自身の主観ではないものの，あたかも自分がそれぞれの登場人物になったかのように物語世界を経験する[13]。そのようにして読者が実感するのが仮定法的実在性（subjunctive reality）である。この仮定法的実在性は，これまで挙げた物語様式の特徴において読者に深く経験される。意味の可能性においては読者は自分なりの経験から得られた意味の可能性を物語に読み込み，想像力豊かな読者ほどより具体的に仮定法的実在性を経験する。登場人物が遭遇する行為と意識の間の葛藤に関しても，読者は自分なりの類似体験の想起に基づきながらその葛藤を自覚する。筋書の展開においても読者は規範・正統性・価値への共感の度合いに応じて危機解決のための人道的献身に共感する。多くの感情や思考を喚起する比喩的な言語により，読者の想像力はいっそう刺激され，読者は眼の前に物理的に存在しているわけでもない物語世界をまるで実際の世界であるかのように経験する[14]。

こうして自分自身の仮定法的実在性を実感した読者が，物語について「この物語は…」と語り始める時に注目すべきことは，読者は実際に書かれた物語というよりは書かれた物語に自分が書き足し・書き直した結果できあがった自分なりの物語を語り始めることである。読者は，自分が読んだ物語の文字通りの再生を行うのではなく，文字通りの物語に基づきながらもそこから自分なりに取捨選択・再構成し独自の意味づけをした物語を語る。偉大な作者は，読者をよりよい作者にする。読者が思わず自分なりに物語を補完し発展させるような作品を書くことが偉大な作者がなしていることである。

科学と対比させた上での物語の概念理解をまとめてみよう。物語は論証よりも古くから普及し，論証よりも広い範囲で使われている。物語は，ルーマンやアレントが説明したような意味 —— 複合的な世界に複数で生きる人間にとっての意味 —— を扱い，現実を描き出す。物語の登場人物が遭遇する試練は主に行為と意識の二つの水準での葛藤として描かれるが，その試練の筋書は典型的には定常状態 - 破損 - 危機 - 修復（あるいは状況説明 - 問題発生 - 対応・解決）という段階で進行する。その根底にある題材は損なわれつつある価値・正統性・規範の意味である。物語の言語は曖昧（喚起的･比喩的）で，読者にさまざまな想像力を発揮させながら，複数の主観的な実在性を描き出し，世界を多義的・多元的に描く。そういった物語の基調は対話的多声性であり，物語の読者は多様な仮定法的実在性を自分なりに統一的に理解する。その統一的理解は，物語を読み終えた読者が「あの話はね…」と語り始める読者が自分なりに書き足し・書き直した物語において示

13　複数の登場人物の声を心中でそれぞれに出し分ける読者は，その行為によってまさにそれぞれの登場人物の物語世界経験を実感しているといえよう。

14　付記しておくなら，言語的に語られる物語で経験する仮定法的実在性は，映像と音声が一方的に与えられる映画の視聴で経験する仮定法的実在性とは異なり，視覚的にも聴覚的にも自らの想像力を駆使することで実感される。したがって，読者の自己の関与性と没入性は映画視聴よりもはるかに高く，読者は仮定法的実在性をそれだけ強く経験できる。

される。物語は読者を作者にし，読者に新たな物語を生み出させる。このことは，物語の一般化可能性と関連するが，それを語る前に，次章では歴史と対比させながら物語についての理解を深めてゆくことにしよう。

3. 歴史と物語

この章では，歴史学の大家であり，全生涯にわたって歴史と文学の関係について関心を寄せてきたとも自ら語るホワイトの最晩年の論考（White, 2014）と，ブルーナーがしばしば参照していた論考（White, 1980）に基づき，物語についての概念整理を行う。次に歴史叙述と（物語の）文学的叙述の共通性について概説し，歴史の科学化をめざした19世紀の動きから生じた「歴史的な過去」の概念と古代ローマから現在にまで続く「実践的な過去」の対比をする。さらに，歴史における物語化の危険性についてもまとめる。

3. 1. 歴史叙述と文学的叙述

歴史に関するホワイトの考えを最初にまとめておくならば，彼は，古代ローマから始まる伝統的な歴史観を現代的に再定式化した歴史観を提示しているといえる。彼は，歴史はその叙述にストーリーという形式を取るものであり，歴史には文学的叙述が伴うことを示している。彼のこの歴史観はたんなる守旧派的な見解ではなく，19世紀からの歴史の科学化の動きによる歴史観（「歴史的な過去」）を批判的に継承した上で再定式化した歴史観（「実践的な過去」）であり，さらには歴史を物語化してしまうことの危険性をも踏まえた現代的なものでもある。

さて，古代ローマで成立したとされる歴史観（the idea of history）は，「過去に実際に生じた出来事の真実に基づいた報告（a truthful account）を，筋書のあるストーリーという形式において（in the form of story with a plot）行う」ものである（White, 1980, p. 52)。ここには一方で「真実の報告」に基づきながらも，他方でそれを「ストーリーという形式」で語る ―― つまりは物語として語る ―― という葛藤が見られる。彼はこれを歴史という学問が引き受ける課題として認識している。

ホワイトは，このようにストーリーとして物語られる叙述を「本来の歴史」（history proper）と呼び，年表（annals）や年代記（chronicle）とは区別する。年表はストーリーの形を取らずただ生じた主要な出来事を年代順にリストとして並べただけの記述である。年代記はストーリーを語っているようでいて，そこには物語の結び（narrative closure）というべきものがなく，ただある時点で単に叙述が終わる（terminate）ものである。このように物語性が欠如した年表や物語性が不十分な年代記は，十全な歴史叙述とは呼べない。

このような考えに基づきホワイトは，歴史は物語的歴史（narrative history）であるとも述べる。それは「それ自身が世界の記述であり，そこにおいては重要な過程がストーリーという形式で自らの姿を現す」ものであり，「出来事をある種のストーリーとして認識される筋書にまとめて説明する記述としてとらえられるように意図されている」（White, 2014, p. 65）とホワイトは規定する。ここではストーリーが記述や説明「である」という確言ではなく，記述や説明「としてとらえられるように意図されている」というもってまわった表現が使われていることに注目したい。一般に，記述や説明といったことばは中立的な意味合いをもち，科学においても多く用いられる[15]。ホワイトの表現からは，歴史叙述における記述・説明は，自然科学的な記述・説明そのものとはいえないが，それに準ずるものとしてとらえられるべきだという主張が見えてくる。歴史は広義の学問ではありながらも，狭義の自然科学とは異なる学問

15　この論文では「記述」を“description”のように事実性を重んずる叙述を表す語として，「叙述」を“writing”のように広く一般的な意味をもつ語として使い分けている。

であるという主張である。

この歴史の性質は，ホワイトが（物語的）歴史の言説（discourse）は文学的な特徴をもつと指摘したところでより明確に示されている。彼は（物語的）歴史という言説は，「指示対象に忠実でありたいと願いながらも，文字通りの意味を超えた意味を生み出す表象という慣習を受け継ぎ，文学的（literary）と認定されてしまうもの ―― まったくの架空の話を仕立て上げるものとまでは認定されないにせよ ――」（White, 2014, p. 20）と述べている。歴史叙述（historical writing）は物語様式の豊かな意味を帯びることを目指すため，文学的叙述（literary writing）の特徴[16]を有するようになるわけである。

しかし古代ローマから「歴史」とされている記述が物語的歴史であり文学的叙述の特徴をもつものだったにせよ，なぜ私たちはそれを継承しなければならないのだろうか。なぜ科学規範様式による歴史ではいけない，あるいはなぜそれでは不十分なのだろうか。このことを次節で考えよう。

3. 2.「歴史的な過去」と「実践的な過去」

歴史は古今東西を通して人々を魅了してきたが，一方で，その記述や説明の中に神話や神学（弁神論），あるいは架空の話，ひいては形而上学やイデオロギーが混入していたことには疑いの余地はない。近代科学が進展するにつれ，歴史を科学化しようとする試み ―― いわば科学規範様式で歴史叙述を行うこと ―― が 19 世紀に起こったことは必然的だったのかもしれない。近代の専門的歴史家（modern professional historian）は，すべての過去（the whole past）のうちでも，「他の歴史家に承認された証拠で基礎づけられ」，「正され組織化された過去（the corrected and organized version）」（White, 2014, p. 9）のみを扱うようになった。これをホワイトは，政治哲学者の Oakeshott（1983）の用語を借りて「歴史的過去」（the historical past）と呼ぶ。

この歴史的過去の尊重が，歴史的記述から神話・神学（弁神論）や架空の話を排除することに多大な貢献をしたことには疑いの余地はないだろう。だが，それが形而上学やイデオロギーから自由であったとはホワイトは考えていない。彼は，19 世紀初頭に大学に設立された専門的な史学（professional historiograhy）は，国民国家の利益に役立つため（to serve the interests of the nation-state）という目的をもち，国のアイデンティティ（national identities）の創出の一助ともなったと指摘する。（White, 2014, p. 15）歴史的過去は教育者・政治家・植民地行政官・政治的イデオローグ・宗教的イデオローグの訓練という「実践的」な目的のために使われたわけである。だがこの歴史的過去のイデオロギー性は当時はあまり自覚されなかった。その理由をホワイトは，当時の科学イデオロギーに求める。その頃支配的であった実証主義（positivism）と功利主義（utilitarianism）によって，科学とは「いかなる関心からも自由」（disinterested）でありながらも「社会的に有用」（socially beneficial）であると考えられたからである。しかし，ホワイトはこれを欺瞞（duplicitousness）と考える。何かが社会的に有用であるかどうかはある特定の関心により定まることからすれば，この科学観は明らかな矛盾となるからである。歴史的過去だけを禁欲的に記述することをめざした科学としての歴史でさえも，イデオロギー（国民国家制度の浸透）や形而上学（実証主義と功利主義）からは自由ではなかった。

しかしここで私たちは，いかなるイデオロギーや形而上学からも私たちは自由であるべきだと主張しているわけではない ―― そもそもそれは人間にとって不可能であろう ――。また，国民国家制度や実証主義・功利主義が完全な間違いであると主張しているわけでもない。それらは少なくとも当時の体

16　ホワイトはヤーコブソン（Jakobson, 1960）に従い，文学的叙述の特徴を，語りの詩的機能（the poetic function）が優勢である点に求めている（White, 2014, p. xi）。もちろんここでいう詩的機能とは，語の選択と配列が，たんなる情報伝達にとどまらない効果を生み出す働きである。

制の政治的・社会的な関心からすれば有用だったことは間違いない。ここで理解すべきは，歴史は――そしておそらく自然科学も――，イデオロギー的に利用されうるし，なんらかの形而上学の影響下にあるということである。また「社会的有用性」を目指すにせよ，それがどの観点・視点からの「社会」であり「有用性」であるかを批判的に自覚することの必要性である。このように自分たちがなすべきことを批判的に吟味することは，従来，歴史が有していた「人々が倫理的な反省をするための体系としての機能」（function as an organization of ethical reflection）（White, 2014, p. 97）であったし，カントが『実践理性批判』で定式化した「実践的」（praktisch/practical）であることの意味であった。歴史は自らの記述に対して批判的であり，そしてその読者に対しても批判的な反省を促すものでなければならない。

かくしてホワイトは批判的な実践的問いかけを行うために歴史的過去とは異なる実践的な過去（practical past）[17]という概念を掲げる。これは古代ローマからの物語的歴史によって扱われてきた過去の再定式でもある。ホワイトは実践的過去を「私たちが日常生活の中で共に生きている過去の観念」とした上で，私たちはあらゆる実践的な問題を解決しようとする際に，これらの観念の中から「できるだけの情報・アイデア・モデル・公式・戦略を引き出す」（White, 2014, p. 9）と説明する。この実践的過去は，私たちが「私たちは何をするべきか」という実践的な問いと共に生きるしかない以上，私たちが参照せざるを得ない過去である。そしてその実践的過去を提供するのが歴史叙述である。もちろん歴史の科学化を経た現代の私たちは，歴史的過去を重視する。だが歴史的過去にとどまらず，実践的過去を文学的に物語様式で叙述するのがホワイトの考える歴史である。

3. 3. 物語化の危険性

このように歴史は，歴史的過去の事実性を踏まえながらも実践的過去として物語の形式で語られるが，そこで語られる一連の出来事はもちろんのこともともと物語として生起したわけではない。出来事は，創意にみちた操作（inventive operation）としての物語化（narrativization）の過程を経て，ストーリーの形式で整理される（White, 2014, p. 67）。そうなれば当然，歴史叙述は一様ではありえず，複数の物語り方（at least two narrations）が可能となる。だがこれをホワイトは悪しき相対主義（「何でもあり」）につながる特徴ではなく，むしろ歴史が学問として成熟するための特徴とみなす。「同じ一連の出来事について少なくとも二つの語り方（versions）が想像されないのであれば，自分が実際に何が起こったのかについての真実に基づいた報告について語る権威（authority）であることを歴史家が求める理由などなくなる」（White, 2014, p. 19）というのが彼の見解である。複数の歴史叙述が可能だからこそ，歴史家の間で誰の叙述が「現実」をもっとも適切にとらえているかという競い合いが可能になり，その競い合いの中で歴史は独自の学問として成熟し，歴史家も権威を得るとホワイトは考える。

このように歴史にはさまざまな物語化が行われるのだが，その物語化が特に単純な形で行われれば，それは「出来事を美化・虚構化・相対化するだけでなく，ドラマ仕立てにして（それゆえに）教訓話にしてしまう」（White, 2014, pp. 81-82）危険性があることに気をつけなければならない。もちろん，何らかの価値・正統性・規範を有し，それに対する人道的献身の重要性を示すのが物語の特徴である以上，このことは物語からは避けられない。だが，その危険性に対する批判的意識が保たれていなければ物語として語られる歴史が，さまざまなイデオロギーの運び手や貯蔵庫になるだけではなく，それ自身がイデオロギー（an ideology in its own right）（White, 2014,

17　ホワイトの翻訳書（ホワイト，2014/2017a）は「実用的な過去」という訳語を使っているが，本論文では“practical”がカントの“praktisch”に由来する語であることを重視し「実践的な過去」と訳した。ちなみにこの「実践的な過去」ももともとはOakeshott（1983）によるものである。

p. 94）となってしまうことを忘れてはいけない。「私たちは何をするべきか」という実践的な問いから求められる歴史に物語という形式は避けられないが，同時にそこであまりに単純な物語化がなされれば，その物語的な歴史はかえって批判意識を抑圧するイデオロギーになってしまう。

物語のイデオロギー化を防ぐために，ホワイトは物語を芸術（art）として語ることを強調する（White, 2014, p. 83）。たしかに物語は，一連の出来事を物語化して，見慣れたものにし（familialize），飼いならす（domesticate）（＝私たちが安心して語れる出来事にする）。だが，それと同時に芸術としての物語は，その物語を異化（defamilialize）し，野生化（dedomesticate）する（＝私たちが容易には語れない出来事にする）こともできる。別の言い方をすれば，出来事を物語として構築（construct）しながら同時にその物語を脱構築（deconstruct）するわけである。このように物語化と脱物語化（denarrativization）を同時に自覚的に遂行することにより，私たちは一連の出来事に対して，何らかの理解可能な形式を獲得すると同時に，それだけでは済まされないという違和感を抑圧せずに済む。こういった葛藤や矛盾をはらむ歴史叙述は芸術表現としての可能性を探り続けるモダニスト小説（modernist novel）に近いものになるともホワイトは言う。

歴史と物語の関係についてまとめよう。歴史は実際に起ったことの真実に基づいた報告でなくてはならない一方で，「私たちは何をなすべきか」という実践的な課題に応えるために私たちが大切にする規範・正統性・価値を基盤にした物語として描かれる。私たちは「歴史的過去」が提示する真実・事実だけでなく，「実践的過去」が示す意味 —— 特にその可能性 —— も必要とするからである。そのような叙述を可能にするために歴史は文学的叙述の特徴をも有するようになる。文字通りの意味を超えた意味も歴史叙述の読解において重要になり，私たちはそこから何をなすべきかの洞察を得ようとする。だが物語化があまりに単純で安直なものであれば，複雑で複合的な現実の出来事が一つの単純な教訓話やイデオロギーに還元されてしまう。私たちは歴史を物語として語る場合に，同時にその物語を脱物語化することも視野に入れておかねばならない[18]。

4. 実践者のための物語

4. 1. 実践者のための物語的歴史叙述

以上の二つの章で，私たちは実践研究における物語の重要性（と危険性）を理解するために，物語をまずは科学と対比することによって理解し，次に歴史の物語性について検討してきた。ここまでの理論的整理で，実践者のために語られる物語とは，実践者の経験という出来事を歴史として語る物語，言い換えるなら物語的歴史叙述であるべきことが明らかになってきたのではなかろうか。この物語的歴史叙述は事実に基づきながらも「私たちは何をなすべきか」という実践者の実践的な課題に洞察を得るための「実践的な過去」を描き出す。そこでは実践者の経験の意味が題材となる。意味は物語の中で，その現実性にのみ基づいて一義的に集約されることなく，その可能性の展開と共に動態的に示される。物語は，実践のあるべき定常状態が破損された危機を提示し，その修復，つまりはあるべき価値・正統性・規範の回復や新生を求める過程が書き表される。その過程の中の登場人物の行為と意識（およびその間の齟齬）が叙述される。その叙述に使われる言語は，状況を読者に想像させるほどには具体的ではあるが，自然科学のように一義的・確定的であるよりは，曖昧（喚起的・比喩的）である。その多様な言語使用により，叙述された複数の登場人物の経験のさまざまな可能性が想起され，経験された世界がさまざま

18　ここでは著者が物語化と脱物語化を自由に選択できるような描写となってしまっているが，多くの小説家が語るように（村上，2010）深い物語は著者が意識的に制御できるものではなく，著者に到来し，著者がそれに巻き込まれてしまうようなものである。

な観点・視点から多元的に理解される。複数の登場人物の対話的多声性が保たれ，声がそれぞれの独自性を保ちながらもそれらの間の関連性が失われないように描かれる。複数の登場人物の経験は，読者一人ひとりに仮定法的実在性として経験される。実践研究における物語は，物語的歴史叙述のように，それ自身がまさに実践的な可能性を読者に提示する。

4．2．科学規範様式も年表・年代記的記述も超える物語的叙述

実践研究における物語は，科学規範様式での記述だけでは明らかに不十分である。誰もが否定しようのない「歴史的過去」とも言うべき確定的事実だけを記した授業の実践記録は，たとえば「出席者○名，発言者○名，総発言時間○分○秒…」といった定量的なものだけになるだろうが，それは年表よりも物語性に乏しい記述であろう。年表には少なくとも記すべき出来事（飢饉や外敵来襲など）という価値判断に基づいた記述がなされるからだ。しかし，科学規範様式の記述を徹底するなら，具体的に定義され実在の客観性が自明な指示対象だけが扱える素材となる。そういった記述では，叙述者が特記したいたとえば「学習者Ａの意表をつく発言」という表現にしても，その「意表をつく」という形容が問題を含むことになる。叙述者の主観性（観点・視点）を帯び，万人に対して一義的には確定できない表現だからである。そのような表現も許されない授業記録を読む読者が，自らの実践の改善に向けての洞察を得ることはおよそ困難なことであろう。

それでは実践の記録が年表なみに「○時○分に学習者Ａが意表をつく発言をする。○時○分に今度は学習者Ｂが先の学習者Ａの発言とまったく逆の主張をする。○時○分に教師は…」といった叙述を採択したとする。厳密な科学規範様式から少し解放された叙述により，読者はおぼろげながらにそこにストーリー性を見出すことができるようになるかもしれない。だが，読者がそこから可能性に満ちた意味を見出し，実践に対する洞察を得ることは依然としてそれほど容易ではないだろう。

では少しだけ物語性を加えた年代記のような叙述ではどうだろうか。「学習者Ａの意表をつく発言が終わった数分後，学習者Ｂは意を決したように学習者Ａの発言とはまったく逆の主張をした。私（教師）はクラスに緊張が走ったことを察知した」といった描写である。「クラスに緊張が走った」といった表現にも，〈ＡとＢの対立→クラスの緊張〉という筆者なりの因果関係の推定が見られるし，「クラスの緊張」といった表現も一義的ではなく喚起的である。読者はそういった叙述に少しは現実らしさを感じるかもしれない。

だがもしその叙述だけで記録が終わったとしたらどうだろうか。「緊張を察知した後どうなったのだ」と読者は宙ぶらりんの状態に置かれてしまうだろう。あるいは，その次にまったく別の種類の叙述が次々に続く，まるでメモ書きのような記録だったらどうだろう。「…一方，学習者Ｃはその日も真面目に授業を受けていた。また，学習者Ｄは相変わらず落ち着きがない。それとは別に，学習者Ｅは…」といった列挙である。そういったメモ書きを見ても読者は「だからどうしたというのだ…」と不全感をつのらせるだけだろう。物語性が不十分で，物語全体から浮かび上がってくるはずの意味が実感できないからである。登場人物（ひいては記述者）がどんな価値を重要に思い，その破損からの回復のために何をしたのかという筋書も見えないからである。年表よりも物語に近づいた年代記のような叙述でも，それは十分に実践的とは言えない。実践研究の叙述は，実践という歴史の叙述であるにせよ，もっとブルーナーが明らかにしたような意味での物語に近づかなければならない。

4．3．速読を許さない物語叙述

そうなると実践研究における物語においては，

一方で出来事の中の確定的事実[19]に基づきつつも，他方であたかも小説のように私たちが生きる意味――私たちの場合なら言語教育に真剣に関わる意味――を自由に描き出すぐらいの叙述[20]が求められるのではないだろうか。もちろんこの「自由」は単なる恣意奔放を意味しない。規範・正統性・価値の危機とそこからの修復という物語を，読者にできるだけ仮定法的に実感させるための自由である。読者である実践者と共に「私たちは何をするべきか」という実践的な問いに倫理的かつ反省的に向かい合うための自由である。その自由にはもちろん制限があり，叙述者は自らが使う表現の可能性あるいは曖昧性（喚起性・比喩性）について自覚的でなければならない。読者が叙述者が経験した実践とはおよそ異なる実践を簡単に想起してしまわないように自制しなくてはならない。そのため叙述者は，文学的叙述の中に，確定的な事実を箇条書きや数値や図表などの形で挿入する自由も有する。「歴史的な過去」を必要に応じて記述しながらも，読者に私たちが実践に関わる意味を仮定法的に実感させ「私たちは何をするべきか」という実践的な問いに少しでも答えられるような「実践的な過去」を叙述するのが実践研究における物語であろう。

他方，たとえ一義的事実を否定も歪曲もしないにせよ，もし物語記述が対話的多声性を失い，一つの価値・正統性・規範の重要性だけを延々と主張し続けるだけの単旋律的な独話となれば，その実践者の物語は単なる教訓話やイデオロギーになってしまう。人間は自らの行為と意識においても葛藤を抱く存在でもあった。ましてや複数の人間が共存する世界においては複数の相容れない観点・視点からの行為や発言が交錯するのが現実の姿であった。さらには，実践の場という現実世界は複合性に富み，教訓話やイデオロギーが想定するような単純な割り切り方では説明も予測もできないものであった。実践者のための物語は，現実を不当に単純化・歪曲化してしまう教訓話やイデオロギーに成り下がらないように，複数のさまざまな声が対話する多声性を保ち，場合によっては脱物語化すら志向しなければならない。

それではそのように実践的な物語叙述と，非実践的な叙述（年表や教訓話やイデオロギーのような叙述）を私たちはどのように区別することができるだろう。物語は，複合的な世界における実践を描く以上，それ自身，複合的であらざるをえない。となれば，物語らしさ（物語性）の判定基準も，誰でも判断できる単純なチェックリストの形で提示できるとは考えにくい――ちょうど複合的な音楽作品のすばらしさが，「和音法上の禁則を使っていない」といった単純な項目のチェックだけでは判定できないように――。たとえば「喚起的な言語が使われているか」といった項目で判断するならば，「どこからどこまでが喚起的な言語であるか」の基準設定が難しく，またそもそも「喚起的言語を使っていさえすればよいのか。抑制的な表現に徹する表現も脱物語化の手法として認められないのか」といった問題が生じるからである。仮にチェックリストを作ったとしても，せいぜいそれは参考にされるだけであり，そのチェックリスト項目の充足状況や合計得点だけで優れた物語が判定できるというのは早計であろう。しかし音楽文化に習熟した者が秀逸な作品と凡庸な作品を一聴して判別できるように，実践の文化に親しんだ者がすぐれて実践的な物語とそうでない物語を直観的に判別できるのかもしれない。筆者はそのような判別の方法の一つは「読み飛ばすことができるか，できないか」ではないかとも考えている。

読み飛ばしながら速読しても，特にその物語の理解が損なわれたとは思えない物語は，実践的な物語ではないように筆者は感じる。これについては，速読

19　もちろんこの出来事の中の事実選択自体に，叙述者の重視する価値・正統性・規範に基づく判断がすでに混入している。歴史叙述から主観性を払拭してしまうことは不可能であろう。

20　Nelson（2011）は戯曲や詩といった形態の文学的表現を，Kalaja, Dufva, and Alanen（2013）は視覚表現（visual narrative）を実践研究に導入することを積極的に主張している。

が可能なのは，物語の意味の可能性が乏しく，登場人物の葛藤や矛盾が描かれておらず，一つの声が独話的に繰り返されるだけだから，と説明できるかもしれない。もう少し具体的な例を出せば，登場人物が無個性的で交換可能な存在として描かれ，登場人物が置かれた状況が具体的に叙述されないままに，特定の教授法（○○メソッド）の有効性に関する声ばかりが聞こえてくるような物語なら，経験豊かな実践者はそれを教訓話やイデオロギーというより商品宣伝に近いものとみなすだろう。

実践経験がなく何でも信じてしまう新人でもない限り，実践経験が豊かな者は教授法の商品宣伝のように単純化された物語が自分の実践に対する洞察を深めてくれるとは思わない。しかし，古典的な比較実験の方法で「○○メソッドが有効である確率が統計的に有意である」ことを示す研究[21]はきわめて「科学的」であるように思え，実践経験のない者は実践に関する真理が示されていると思い込むかもしれない。だが，そういった一見科学規範様式だけに基づいたように思える研究も，実は「授業の成功は教育方法の選択次第にすぎない」というストーリーに基いていることを忘れてはならない。このストーリーは研究論文の本文にはめったに現れず読者の目から隠されたままであることが多いが，教育実践の複合性を経験的に熟知する実践者はその基盤的なストーリーに気づき，それを単純すぎると思う。教授法選択以外の観点・視点からの声がまったく聞こえてこない記述を退屈に思う。教室実践の複合性を熟知しているからである。

しかし逆に，速読や飛ばし読みを許さない物語性に満ちた実践者の物語をなぜ実践者は有益だとみなすのだろう。次の項ではこの問題を一般化可能性の観点から考える。

21　現在の言語教育における実験研究の批判については柳瀬（2010，2017b）も参照されたい。

4．4．物語の一般化可能性

これまで私たちはすぐれた物語的叙述から実践者が実践者的な洞察を得ることを経験的に自明なこととして扱ってきた。ここではその経験的自明性をできるだけ一般化可能性の観点から言語的に説明することを試みる。

一般化可能性（generalizability）もしくは一般化（generalization）といっても，物語の場合は，量的研究で前提とされているような統計的一般化（statistical generalization）や法則的一般化（nomological generalization）を意味はしない（Eisenhart, 2008）。これらでは（ノイズとして片付けられる偏差を除いては）均一的な母集団（population）を前提とし，そこからランダムサンプリングなどで得た標本（sample）を詳しく調査したら，その結果を再び母集団に対して確率的あるいは法則的に敷衍できるという推論が前提とされている。この考え方は，現実世界を特定の一つの観点・視点から観察しそれ以外の違いは無視する一義的・一元的な世界認識を採択することが妥当な場合は適切な推論である。しかし現実世界の実践的な問題は複合的で多様な可能性に満ちており，多義的・多元的な世界認識をもたない限り現実的な対応ができないものであった。物語を使った実践研究の一般化可能性を量的研究における一般化で説明することは原理的に誤っている。

質的研究でしばしば語られる一般化あるいは一般化可能性は，事例で根拠づけられた理論（Grounded Theory）[22]による一般化や転用可能性（transferability）である（Eisenhart, 2008）。事例で根拠づけられた理論による一般化は，興味ある事象をさまざまな事例で次々に検証することを仮説の基盤とする方法を取っている。これは上記の量的研究における統計

22　Grounded Theory は日本では一般に「グラウンデッド・セオリー」と表記されていることは筆者も熟知しているが，前に述べたカタカナの使用に対する抑制的な方針ゆえ，ここでは「事例で根拠づけられた理論」と表記している。

的一般化や法則的一般化が演繹的な推論を行っている（＝標本における結果を母集団に敷衍する）こととは異なり，一つの事例で得られた仮説を別の事例，さらに別の事例…と検証を重ねることで帰納的な推論を行っている（＝事例を積み重ねることによって結果の一般性を高める）点で極めて対照的である。だがこれらは演繹的か帰納的かという点で推論の方向性こそ異なれ，共に普遍法則（＝時間にも空間にも制約されず，常にどこでも事実となることを定式化する法則）を前提としている点で共通している。もちろん世の中には普遍法則として認識される事態もたくさんある（例えば自由落下運動の方程式）。だがこれらは一義的・確定的な指示対象しか扱わない科学規範様式の認識に基づくものであり，世界の複合性と人間の複数性を前提とする物語様式の認識ではない。

物語を用いた実践研究のためにはこれらよりも適切な一般化の理論が必要である。その点，「転用可能性」は類似性に基づく推論であり，知見の普遍的適用性を厳密には前提としておらず，物語様式での一般化可能性に少しは近づいているかもしれない。極端に単純化した論証となるが，仮に ABCDE と表記できる状況があったとする。その状況で得られた知見は，その状況に類似した BCDEF や CDEFG の状況でも（それぞれ異なる度合いで）転用可能であることになる。この論を進めるなら，当初の研究で解明されたことは，EFGHI や WXYZA や BJKLM の状況でも（より低い度合いで）転用可能である。このように程度の異なる適用性は普遍的とはとても呼べないため，転用可能性は前述の三つの一般化とは異なる。

しかし転用可能性の説明には問題点がある。それは，研究の知見の利用を考える読者の要因が軽視されていることである。この点を考慮し，読者・利用者の主体的要因を重視したのが読者・利用者による一般化可能性（reader or user generalizability）である（メリアム，1998/2004, p. 308）。

この一般化可能性の説明は，研究の知見の一般化を主張できるかどうかは，研究者の側だけではなく，その研究を読み解きながらその知見を自らの状況で適用できるかについて想像する読者・利用者の側にも基づくものであることを強調している。研究の適用可能性（applicability）を判断するのは，いかに研究を利用するかという実践的問いかけをもって研究を読み込む読者の働きかけが重要なのである。このような実践的読解こそは，物語の言語技法と対話的多声性によって想像力をかきたてられ，物語を書き足し・書き直しながら，仮定法的実在性を多元的に経験する物語読解であった。物語の読者は，仮定法的な経験によって広がり・精妙になり・多元化した意味空間により，現実問題への対応能力を高める。読者は「つまりこの研究が教えていることは…」と研究を独自に書き足し・書き直すことによって，自分の状況により適った理解を生成する[23]。

ここでは「一般化」ではなく「一般化可能性」という表現が使われていることにも注目したい。つまり，読者・利用者による一般化可能性とは，研究からの一般化が保証されていることではなく，読者・利用者がうまく研究を読解しその研究を自分なりに書き足し・書き直すことができるなら一般化も可能であることを述べているにすぎない。これは，科学規範様式での一般化のように利用者である読者が単に受動的な消費者のようになって与えられる一般化ではなく，読者の想像力と思考力によって読者が能動的に適用の判断を行う可能性であり，読者を意味の探求者にすることである。

それだけの努力を必要とするこの読者・利用者による一般化可能性には積極的な側面がある。それは，普遍的な知見を受動的に受け取る一般化では望めないような，個別化された洞察を得ることができるこ

23　Nelson（2011，p. 476）は「開かれた意味」（open-ended meaning）という用語を使い，読者がある実践研究から自分なりの結論を見出す現象を記述し，また，読者がそうすることを奨励しているが，同時にそのような発想はこれまでの学術論文にまつわる常識によって抑圧されていたと述べている。

とである。もちろんこの洞察は読者の的確な読解に応じて得られるものである。マニュアルのように簡単にそして一律的に与えられるものではない。だが，こと言語教育という実践に携わる者にとって，そういった物語の読解や執筆が困難すぎて不可能であると主張することは許されないであろう。言語教育者が学習者の言語力を高める仕事をしているのなら，同時に自らの言語力を高める責務ももつだろう。この点，さまざまな実践分野における実践研究の中でも，言語教育者による実践研究はその物語性をもっとも豊かにすることが求められている。物語の一般化可能性は，この読者・利用者による一般化可能性としてとらえるのがもっとも的確であり，実践研究をもっとも実践的にすると筆者は考える。

5. 結語

この論文では，物語様式の思考に基づく物語が実践研究において重要であることを論じた。世界の複合性と人間の複数性に基づいた現実における諸問題を扱おうとするなら，私たちは対話的多声性を基調とする物語を書き，それを通じて意味をその可能性も含めて自覚的に表現すること，そしてその物語読解においては，仮定法的実在性の実感から引き起こされる想像と思考によって読んだ物語を自分なりに書き足し･書き直すことが重要であることを示した。また,「私たちは何をするべきか」と物語の知見の適用可能性について検討する読者・利用者による一般化可能性が物語の一般化可能性を説明する概念であることも示した。

実践研究は限定的で抑制的な科学規範様式や歴史的過去の作法だけによって書かれるべきではない。だが，このことは実践研究でそれらの作法が使われることを否定するものでもない。むしろ実践研究においても必要な箇所では科学規範様式や歴史的過去の作法による記述がなされるべきであろう。確定的な事実を提示するべきところで提示しないのは知的怠慢である。しかし同時に，科学規範様式で確定できる事実だけで現実が再構成できると考えるのは愚かなことである。

また，私たちは物語の重要性と共に危険性についても学んだ。実践という人間の営みから意味を取り去ることができない以上，物語は実践的な過去を描くこととなり，そこには実践の意味の結晶ともいうべき価値・正統性・規範などが示される。だが，物語がそれらの重要性だけを連呼し続ける独話的で単純な物語になってしまえば，その物語は一面的な教訓話やイデオロギーになってしまう。自らが書こうとしている話がそのような単純な物語化に陥りそうになれば，書き手はさまざまな文学的叙述の手法を駆使しながら脱物語化すらも試みなければならない（あるいはもっと深い物語り方が自分の中に湧き起こるのを待たなければならない）。加えて，表に表れない大きなストーリーに気づかないでいることも物語の危険性の一つでもあった。私たちは一見，科学規範様式で語られているような文章が依拠している基盤的なストーリーの正体も見極めなければならない。

物語は太古から続く文化であり，私たちはそれを直感的に活用することができる。だが，実践的過去を語る文化が歴史の科学化に伴い一時期軽んじられたことに代表されるように，人文学のいくつかの分野において物語を使って記述・説明を試みることは非科学的とされ，一時期はほとんど禁忌の対象のようになった。しかし科学規範様式による記述・説明だけでは「割り切れない」ことがら[24]の存在をよく知る実践者は，次第に質的研究の中で物語を使用する文化を復活さた。だがこれはいわば直感的な復活であり，理論的に十分正統なものとされた復権ではないことは1．1．の諸文献が示唆しているとおりで

24　Rationalism の“ratio-”を「比」としてとらえ，rationalism を「すべてを割り切って考える流儀」，irrationalism を「割り切れないことを大切に考える流儀」としてとらえるなら，「割り切れないこと」にも積極的な意義を見出すことができる。人間の営みの解明には，片方だけでなく，両者の流儀を使いこなすことが必要だろう（柳瀬，2014）。

ある。実践研究において物語を利用することの重要性と危険性が理論的に解明されていなければ，実践研究での物語利用もその潜在力を十分には発揮できないだろうし，今後も科学規範様式に基づく批判や介入によって物語様式のよさが損なわれてしまうことも考えられる。本論文は，ブルーナー，ルーマン，アレント，ホワイトといった20世紀を代表する人文社会系の知性の論考を組み合わせることによって，実践研究における物語について理論的な整理を行った。このような論考が相互批判的に積み重なり，実践研究における科学規範様式と物語様式の的確な使い分けの文化が成熟していくことを筆者は願っている。

今後の課題の一つとしては，物語を使った実践研究を批判的に発展させるための学術誌査読体制の成熟がある。実践研究のよしあしを，単純なチェックリストの充足状況や合計得点などで機械的に断定することへの疑義は4．3．で述べたとおりだが，逆に，物語を使った実践研究に関する判断を神秘化し，一切は明言化できないとする反啓蒙的な態度を取るのもおかしなことであろう。実際，たとえば第二言語としての英語教育に関する国際学術団体であるTESOLは事例研究（case study）[25]や（批判的）エスノグラフィー（(critical) ethnography）や会話分析（conversation analysis）などの質的研究に関するガイドラインを提示し，Qualitative Research Guideline Projectは医療分野での質的研究の指針（Cohen & Crabtree, 2006）を公表している。もちろんこれらの見解も一朝一夕にできあがったものではないし，今後も金科玉条のように堅持されるものでもないだろう。たとえばLazaraton（2003）の批判はTESOLの上記ガイドラインの改訂（分化）に明らかに影響を与えた[26]と思われるし，彼女が言うように，どのような研究のよしあしを判断する基準（criteria）を私たちが有するにせよ，「私たちは，基準といえど相対的に位置づけられたものであることを理解し，現存する『リスト』に適合しない研究が登場した際には基準を改訂する可能性に途を開いておかなければならない」（Lazaraton, 2003, p. 8）わけである。

これからは日本語での学術圏においてもこのような指針の策定と改訂の文化が築かれてゆくべきかもしれない。その繰り返しが実践研究に対する私たちの自覚を高める。そこで忘れてはならないのは，実践が物語の様式で叙述される限り，一方でそれは科学のように真実への忠誠を誓いながら，他方で芸術としてその叙述方法を自己創造しうることである。実践研究の良否を判断する基準を明文化する方向に向かうとしても，それが芸術としての創造性を潰してしまってはならない。

ここで科学と芸術の両方を志向することは一見矛盾のようにも思えるかもしれない。だが，マサチューセッツ工科大学のメディアラボという知の最先端で所長を務める伊藤（2013）は，真理を追求する科学（science）と意味を追求する芸術（art）の二つの発想を同時にもち，かつ，真理を表現する工学（engineering）と意味を表現するデザイン（design）の二つ発想も併せ持つ ―― つまりは志向の異なる科学・芸術・工学・デザインの四つの発想を同時に有する ―― ことが創造性の鍵であるとも述べる。実践を語る物語も，出来事の真実性と意味を追求しながら，同時にそれらを具体的に表現する点において，この四つの志向性を併せもつ。それならば物語を使った実践研究はこれからも創造的であり続けるだろう。

文献

伊藤穣一（2013）．狩野綾子（訳）『「ひらめき」を生

25　*Qualitative Research: Case Study Guidelines* などのURLはTESOL International Association（*n.d.*）のホームページから辿れる。

26　Lazaraton（2003）は当時のTESOLの *Qualitative Research Guideline* がエスノグラフィーに傾斜し，会話分析にとって不利なものであることを指摘した。

む技術』角川書店.

オルソン，R.（2018）．坪子理美（訳）『なぜ科学はストーリーを必要としているのか――ハリウッドに学んだ伝える技術』慶応義塾大学出版会.（Olson, R. (2015). *Houston, We Have a Narrative: Why Science Needs Story*. The University of Chicago Press.）

ジェインズ，J.（2005）．柴田裕之（訳）『神々の沈黙――意識の誕生と文明の興亡』紀伊國屋書店.（Jaynes, J. (1976). *The origin of consciousness in the breakdown of the bicameral mind*. Boston, MA: Houghton Mifflin.）

細川英雄, 三代純平（編）（2014）.『実践研究は何を目指すか――日本語教育における実践研究の意味と可能性』ココ出版.

千野帽子（2017）.『人はなぜ物語を求めるのか』筑摩書房.

ホワイト, H.（2017a）．上村忠男（訳）『実用的な過去』岩波書店.（White, H. (2014). *The practical past*. Northwestern University Press.）

ホワイト，H.．上村忠男（編訳）（2017b）.『歴史の喩法』作品社.

村上春樹（2010）.『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです』文藝春秋.

メリアム，S. B.（2004）．堀薫夫，久保真人，成島美弥（訳）『質的調査研究法入門――教育における調査法とケース・スタディ』ミネルヴァ書房.（Merriam, S. B. (1998). *Qualitative research and case study: Applications in education*. Jossey-Bass.）

柳瀬陽介（2010）．英語教育実践支援のためのエビデンスとナラティブ――EBM と NBM からの考察『中国地区英語教育学会研究紀要』40, 11-20.

柳瀬陽介（2014）．人間と言語の全体性を回復するための実践研究『言語文化教育研究』12, 14-28.

柳瀬陽介（2017a）．意味，複合性，そして応用言語学『明海大学大学院応用言語学研究紀要――応用言語学研究』19，7-17.

柳瀬陽介（2017b）．英語教育実践支援研究に客観性と再現性を求めることについて『中国地区英語教育学会研究紀要』48，83-93.

柳瀬陽介（2018a）．優れた英語教師教育者における感受性の働き――情動共鳴によるコミュニケーションの自己生成『中国地区英語教育学会研究紀要』48，11-22.

柳瀬陽介（2018b）．意識の統合情報理論からの基礎的意味理論――英語教育における意味の矮小化に抗して『中国地区英語教育学会研究紀要』48，53-62.

Arendt, H. (1968). *Men in dark times*. Harcourt Brace & Company.

Arendt, H. (1998). *The human condition*. University of Chicago Press.

Arendt, H. (2002). *VITA ACTIVA oder von tätigen Leben*. Piper.

Barkhuizen, G. (2011). Narrative knowledging in TESOL. *TESOL Quarterly, 45*(3), 391-414. doi:10.5054/tq.2011.261888

Barkhuizen, G. (2013). Introduction: Narrative research in applied linguistics. In G. Barkhuizen (Ed.), *Narrative research in applied linguistics* (pp. 1-16). Cambridge University Press.

Barkhuizen, G., Benson, P., & Chik, A. (2013). *Narrative inquiry in language teaching and learning research*. London: Routledge.

Bruner, J. (1986). *Actual minds, possible worlds*. Harvard University Press.

Bruner, J. (1990). *Acts of meaning*. Harvard University Press.

Cohen, D., & Crabtree, B. (2006). *Using qualitative methods in healthcare research*. Retrieved from http://www.qualres.org/

Eisenhart, M. (2008). Generalization from qualitative inquiry. In K. Erickan & W. Roth (Eds.), *Generalizing from educational research* (pp. 51-

66). Routledge.

Jakobson, R. (1960). Linguistics and poetics. In T.A. Sebeok (Ed.), *Style in language* (pp. 350-377). The MIT Press.

Johnson, K. E., & Golombek. P. R. (2013). A tale of two mediations: Tracing the dialectics of cognition, emotion, and activity in novice teachers' practicum blogs. In G. Barkhuizen (Ed.), *Narrative research in applied linguistics* (pp. 85-104). Cambridge University Press.

Kalaja, P., Dufva, H., & Alanen, R. (2013). Experimenting with visual narratives. In G. Barkhuizen (Ed.), *Narrative research in applied linguistics* (pp. 105-131). Cambridge University Press.

Lazaraton, A. (2003). Evaluative criteria for qualitative research in applied linguistics: Whose criteria and whose research? *The Modern Language Journal, 87*, 1-12. doi:10.1111/1540-4781.00175

Luhmann, N. (1990). *Essays on self-reference*. Columbia University Press.

Luhmann, N. (2007). *Die Gesellshaft der Gesellschaft*. Suhrkamp.

Nelson, C. D. (2011). Narratives of classroom life: Changing conceptions of knowledge. *TESOL Quarterly, 45*(3), 463-485. doi:10.5054/tq2011.256799

Oakeshott, M. (1983). *On history and other essays*. Blackwell.

TESOL International Association (*n.d.*). *Qualitative research: Case study guidelines*. Retrieved from http://www.tesol.org/read-and-publish/journals/tesol-quarterly/tesol-quarterly-research-guidelines/qualitative-research-case-study-guidelines

Tononi, G. (2012). *Phai: A voyage from the brain to the soul*. Phantheon.

White, H. (1980). The value of narrativity in the representation of reality. In W. Mitchell (Ed.), *On narrative* (pp. 1-23). The University of Chicago Press.

White, H. (2014). *The practical past*. Northwestern University Press.